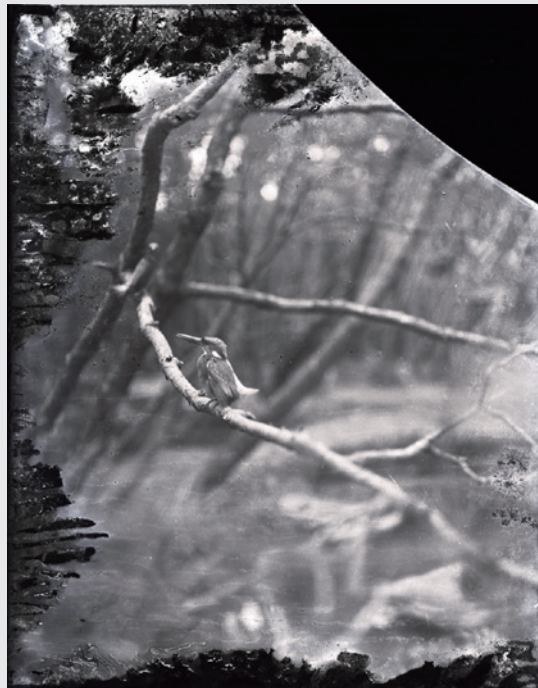


100 年前にカワセミを撮った男・下村兼史  
－ 日本最初の野鳥生態写真家 －

---

インタビューシリーズ・第1弾  
「下村兼史の人と作品を語る」  
(前編)

ゲスト：平岡 考 氏  
(公益財団法人 山階鳥類研究所・広報コミュニケーションディレクター)



《カワセミ》1922年1月5日 佐賀県佐賀市  
撮影：下村兼史 所蔵：(公財) 山階鳥類研究所

## 目次

日本最初の野鳥生態写真家・下村兼史の仕事 \_\_\_\_ p.3

カメラと感光材料の進化 \_\_\_\_ p.5

1922年、日本で最初に撮られた野鳥はカワセミ \_\_\_\_ p.7

戦災で焼失したと思われていたガラス乾板 \_\_\_\_ p.9

### 本プログラムについて

フジフィルム スクエアは、価値の高い写真作品を銀写真プリントで展示し、ご来館者に写真作品との出会いの場をご提供しています。また、作品への理解をさらに深めていただくために、ギャラリートークや講演会等の鑑賞サポート活動に力を入れており、2019年度には1万4千人以上の方々にご参加いただきました。

現在は新型コロナウイルスの影響で、写真展会場で行う鑑賞サポート活動は見合わせておりますが、新たな関連プログラムとして、特別ゲストへのインタビュー記事を公式ウェブサイトにて公開してまいります。

ご来館いただき写真展をご鑑賞いただいた方にも、ご来館されておられない方にも写真の魅力を知っていただき、作品制作の背景や意図等への理解を深め、お楽しみいただける機会となれば幸いです。また、本インタビュー記事が写真文化の価値を将来に伝えていくための有益な資料となることを願っています。



フジフィルム スクエア 写真歴史博物館 閉館後の無観客会場でのインタビュー風景 ゲストの平岡 考氏（左）と聞き手の大澤友貴氏（右）

## 日本最初の野鳥生態写真家・下村兼史の仕事

—— コロナ禍で開催中止となってしまったギャラリートークに代えて、山階鳥類研究所・広報コミュニケーションディレクターの平岡考さんに、下村兼史展の会場でお話を伺いたと思います。よろしくお願いします。

**平岡** よろしくお祈いします。素晴らしい展覧会をご準備いただき、開催していただいたのですが、この情勢の中、遠くの方は足を運びづらいということもあると思います。このような形ですが、下村兼史のこと、下村の写真について広くお伝えできればと思います。

—— まず、下村兼史について教えていただけますか。

**平岡** 下村兼史は1903年生まれで、1967年に没しています。野鳥生態写真の先駆けということになりますけれども、下村が撮影を始めた1920年代は、機材の性能がまだ十分ではない時代でした。

—— 今はデジタルカメラやスマートフォンのカメラが主流ですが、それよりずっと昔のことですね。

**平岡** そうですね。こちらの写真歴史博物館にも歴代のカメラがたくさん展示されていて、古いものから、近年の一眼レフのカメラ、コンパクトカメラなどさまざまなものがありますが、下村が使っていたのは、とんでもなく重い、箱のようなカメラでした。

—— これでは撮影は大変ですね。

平岡 他にレンズや三脚も持ち歩かなければならなかったので、カメラだけでも3.8キロ、すべて合わせると10キロ近くにもなったと言われています。そんなふうですから、誰も野鳥を写真で撮ろうとは思わなかったような時代に、下村は野鳥生態写真を撮り始めたということになります。

—— 大変な挑戦でしたね。

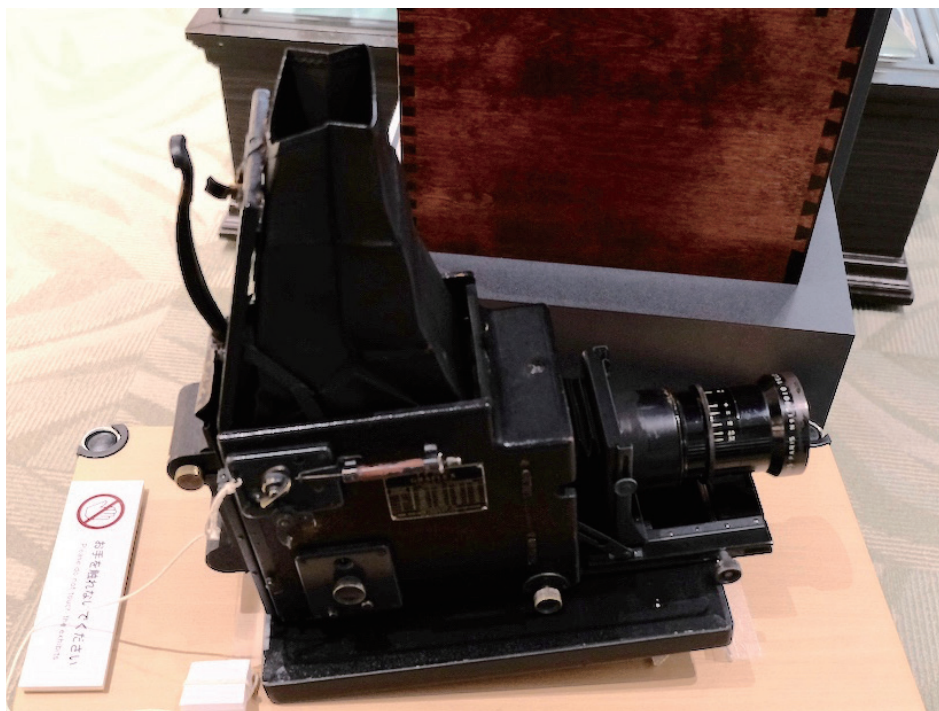
平岡 最果ての地へ行って珍しい鳥を撮ったり、野鳥の有名な生息地に何年間も通うなどして、さまざまな野鳥を写真で記録しました。おおまかに分けると、戦前は写真の仕事を、戦後は映画の仕事を残しています。

—— 映画も撮っていたのですね。

平岡 何作もの映画を撮っていますが、とくに『或日の干潟』（1940年）という短編の記録映画が有名です。東京湾奥部の千葉県新浜と、有明海の干潟に来る鳥や、そこに棲息する生き物を記録した映画ですけれども、「日本映画ベスト150」ですとか、「日本の短編映画100選」にも選ばれています。上皇陛下が天皇在位時代に、有明海で開催された「全国豊かな海づくり大会」という催しに臨席された際のお言葉の中で、幼い頃にこの映画を見て今でも記憶に残っていると、わざわざお話しされたというエピソードもあります。名作の呼び声高い映画作品です。

—— 下村は他にどんな活動をしたのでしょうか。

平岡 写真や映画の他にも、野鳥の図鑑やエッセイなどでもたくさんの仕事を残しています。普通の人が行けないような最果ての地にこんな野鳥がいるんだということを、読みやすい素晴らしい文章で書いています。



下村兼史が使用した R.B. オートグラフフレックスと同型のカメラ





展示風景

才能あふれる人だったのです。

——今回、作品が展示されるまでのいきさつについて教えてくださいませんか。

**平岡** 山階鳥類研究所は、下村兼史の没後にご遺族から写真や資料などをご寄贈いただきました。膨大な数でしたが、2005年から2008年に集中的に整理保存作業を進めまして、その結果として2018年に「下村兼史 生誕115周年 - 100年前にカワセミを撮った男・写真展」を開催することができました。今回の写真展も大きくいうとその一環ということになります。

——写真や資料はどのようなものがあるのですか。

**平岡** 写真もプリントだけではなくて、ガラス乾板やフィルムなどもあります。それから手紙だとか、映画のシナリオだとか、メモなんかもあるんですね。点数としては、公表数だと1万点以上ということになりますが、整理作業はひと通り終わっているものの、掘り下げれば掘り下げるほど、またいろいろ見つかるというところもあります。

## カメラと感光材料の進化

——ではさっそく、下村の写真について教えてください。

**平岡** はい。まずその前に、カメラと原板のことをお話ししたいと思います。今、デジカメやスマートフォ



平岡 考氏

ンのカメラで撮ったもの、つまりレンズを通った画像が何に写るかという、フォトダイオードという半導体です。1000万画素などといいますが、それは1000万個の、光が当たると電荷が発生するフォトダイオードというものが使われているという意味で、そこに当たる光の量で電荷が変わるので、それを記録すると画像になるのです。

—— 下村の時代は、もちろんデジカメはありませんでしたね。

**平岡** その通りですね。デジカメの前の世代は何かというと、フィルムです。これは、今日わざわざ買ってきたのですが（笑）富士フイルムさんの、35ミリフィルムです。デジカメの前は、みんなこれを使っていたわけです。

—— はい。

**平岡** 平たく言いますと、これはフィルムの表面に銀の化合物でできた感光材が使われていて、光が当たるとそれが変化します。それに化学的な処理をすると、画像がフィルムに定着します。それはネガフィルムの場合、明暗が逆さまになっているので、それをもう一回、また明暗が逆さまになる印画紙に焼き付けて、一周回って元の被写体と同じ画ができると。そういう仕組みになっているわけです。

—— そうですね。

**平岡** そのフィルムの前に使われていたのが、ガラス乾板です。ガラスの板に感光材を塗ったもので、画像が記録される化学的なしくみはフィルムと同じです。今のデジタルから見ると2世代前ということになる



35 ミリフィルムを説明する平岡氏

でしょうか。下村は、初期はこれを使っていました。  
—— 1920年代頃のことですね。

**平岡** 撮り枠にガラス乾板を入れて、箱のようなカメラの後ろにセットし、引き蓋を抜いてシャッターを切ると、一瞬だけガラス乾板に光が当たると。そういう撮影手順になります。

—— 手順も多く、今のように即座には撮れないと思いますが、そのようなガラス乾板を使ってどのような写真が撮られたのかを見ていきましょう。



手札判（基本サイズ82×107ミリ）のガラス乾板のサンプル。枠の中央の黒く見える部分がガラスで、ここに像が記録される。

## 1922年、日本で最初に撮られた野鳥はカワセミ

**平岡** 最初の作品はこちらです。カワセミですね。1922年ですから、約100年前に撮影されたもので、日本で最初の野鳥生態写真です。

—— 驚くほど、カワセミが鮮明に写っていますよね。こちらもガラス乾板で撮影されているとのことですが、どうやって撮ったのでしょうか。

**平岡** 今のように超望遠のレンズなどもあるわけではないので、撮影の方法も下村が考えているんですよ。

—— まさに先駆者、開拓者ですね。



《カワセミ》1922年1月5日 佐賀県佐賀市

**平岡** 下村は、このカワセミがこの枝にしょっちゅう止まることに気づいて、大きなカメラをこの前に置き、シャッターレバーに紐を結びつけて、それを遠くから引いて、撮影しているんです。

—— 素晴らしい仕組みを考えましたね。それに加えて、カワセミの習性を熟知していたからこそ、できたといえそうですね。

**平岡** そうですね。下村はエッセイにもこの時のことを詳しく書き残しています。

—— ちなみに、カワセミというのは動きの速い鳥ですか。

**平岡** そうですね。動きの速い鳥ですけれども、カワセミというのは、この写真でもそうですけれども、下に水面があるようなところ、池の上に張り出した枝などに止まって、下にいる魚を狙うわけです。飛ぶのはヒュッと素早く飛びますが、枝などで魚を狙うときはじっとしてますので、こういう時がチャンスなわけです。

—— なるほど。

**平岡** 鳥の行動をよく観察していた下村はこのことに気づいて、ここならばチャンスがあると、カメラをセットしたわけです。

—— この日本最初の野鳥生態写真には、ほかにエピソードがあるのでしょうか？



## 戦災で焼失したと思われていたガラス乾板

平岡 このカワセミの写真のガラス乾板は、戦災で焼失したと下村は本に書いているんですが、実は、先ほどお話した、ご遺族から寄贈いただいた資料の中に残っていたんです。1997年に下村の弟子ともいわれる吉田元さんという方が見つけました。

—— 大発見でしたね。

平岡 右上が欠けていて、周辺の乳剤も劣化してはいますが、日本最初の野鳥生態写真の原板ということで、歴史的に大変貴重なものです。プリントは現存していないので、今回はこのガラス乾板の複写データをもとに複製した銀写真プリントを展示しています。

—— 下村はその後どんなふうに野鳥を撮影していったのでしょうか。

平岡 カワセミの写真を撮った時は、下村はまだ若く、19歳でした。彼は佐賀に住んでいたのですが、有明海の広い水辺に鳥が来るのを撮ろうと、お金が貯まるとガラス乾板を1ダース、12枚を買って、残りを電車賃に当てて、その水辺に行って写真を撮りためていたようです。



《カワセミ》のガラス乾板  
所蔵：(公財)山階鳥類研究所

—— 野鳥を撮りたいという情熱が伝わってきますね。

**平岡** 下村は4年半の間に約600枚のガラス乾板で写真を撮っているのですが、割り算しますと月に10枚前後、撮影していたことになります。

—— 月に10枚。数としては少ないですが、1枚1枚に大変な労力が費やされたことを思うと、多いとも感じますね。

**平岡** その後、下村は撮りためていたものを持って上京し、農林省にいた鳥類学者の内田清之助に見せたところ、高く評価されます。そこから野鳥生態写真家としての道が開けていくわけです。

—— なるほど。ここからいよいよ、下村兼史の本領が発揮されるのですね。

聞き手：大澤友貴（フォトクラシック）

\*インタビューは後編に続きます。8月13日（木）に掲載予定です。

● ゲストプロフィール

平岡 考（ひらおか・たかし）

山階鳥類研究所自然誌研究室専門員・広報コミュニケーションディレクター。

標本管理を長く担当した後、2005–2008年、下村兼史の写真資料に関する整理保存作業、調査研究に携わる。2018年、「下村兼史 生誕115周年 – 100年前にカワセミを撮った男・写真展」（主催：山階鳥類研究所）実行委員。現在、広報担当者として広報紙「山階鳥研ニュース」やウェブサイトでの発信などを担当。

フジフィルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展  
関連プログラム

100年前にカワセミを撮った男・下村兼史 – 日本最初の野鳥生態写真家 –

インタビューシリーズ・第1弾

「下村兼史の人と作品を語る」（前編）

ゲスト：平岡 考 氏（公益財団法人 山階鳥類研究所・広報コミュニケーションディレクター）

展覧会

会場：フジフィルム スクエア 写真歴史博物館

会期：2020年7月1日（水）– 9月30日（水）

主催：富士フィルム株式会社

特別協力：公益財団法人 山階鳥類研究所

協力：公益財団法人 日本野鳥の会、有限会社バード・フォト・アーカイブス

監修：公益財団法人 山階鳥類研究所

後援：港区教育委員会

企画：フォトクラシック

記事

公開日：2020年7月30日

発行：富士フィルム株式会社 宣伝部

編集：フォトクラシック

デザイン：脇野直人

© 富士フィルム株式会社 禁無断転載